



TITLE:

土佐藩ノ地割制度(四・完)

AUTHOR(S):

小野, 武夫

CITATION:

小野, 武夫. 土佐藩ノ地割制度(四・完). 經濟論叢 1918, 6(2): 232-241

ISSUE DATE:

1918-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127331>

RIGHT:

土佐藩ノ地割制度(四、完)

小野 武夫

六、分割標準

『地方大要』ノ『地割ノ事』ニ曰ク『本田割地ト云フハ田畠ノ底地ノ善惡無甲乙様ニ入合作致スナリ、或ハ三百石ノ本田三拾ノ割ハ地拾石ナリ、是ヲ壹石(一口?)ト云フ、又五石七石ヲ壹石(一口?)ト割ルモ有リ、其村云合ニテ極ル事ナレハ各地高極ナシ』ト、『地方慣習手引草』ニハ『土佐郡一宮村ニハ六十四町餘ノ本田アリ、之ヲ六十四圓半ノ圓地ト爲シ來レリ、明治九年以後ニ百有餘圓ニ改メタリ』トアリ、又、『小作慣行』中長岡郡常通寺村組合ノ記事ニ曰ク『其廻リ地等ニ至テハ壹町歩ヲ以テ一圓トセシ村方アリシモ、多クハ五反歩ヲ一圓ト定ム』トアリ、又同書中長岡郡大津村組合ノ記事ニハ『其廻リ地ナルモノハ五反二十五歩ヲ一圓ト定ム』ト記セリ。由是觀之、土地ノ分割標準ハ村村ニ依リ異リ、各村農民ノ協議ニヨリ決定スル習ヒニシテ、一定セル分割標準トテハナク、年月ヲ經ル間ニ人口増加スレバ隨テ圓數ヲモ増加スルノ必要ニ迫リタルモノノ如シ。

七、割換除外地(取扱本田)

然ラハ苟モ本田ト呼ハル土地ハ悉ク一定年期ニ割換ヲ行ヒタルヤト云フニ、之ニハ若干ノ除外例アリタルモノノ如シ。『地租改正紀要』ニ『但シ屋敷地及山村部ハ然カセス』ト記セルニ見レバ

山間溪谷ノ田地ハ地割區域ヨリ除外シタルモノノ如シ、而シテ農民ノ屋敷地ヲ割換ヨリ除外スルハ地割制度本來ノ目的及ヒ地割實行上ノ手續ヨリスルモ當然ノ仕法ニシテ敢テ土佐藩ニ於テノミ見得ヘキ慣習ニアラサルヤ勿論ナリ。又割換除外地ハ單ニ家屋ノ敷地及山村ノ耕地ニ限ラス、平地肥沃ノ本田中ニ散在スル荒蕪地ヲ開拓スレバ此新開ノ水田ハ割換ヨリ除外セラルルナリ、『地方大要』ノ一節ニ曰ク

持地ノ事

持地ト云フハ本田久荒開闢發作過分掛リ其上開方ニ成候テモ作物其村本免並造用之考ニモ不合場所ハ捨置有之ヲ願出候ヘハ見分ノ上持地ニ被割地ヘ不入也右ノ場所見分ノ時節少シニテモ先達而開發地於有之ハ其分ハ割地ニ入答證議可證儀也

ト、又同書中別ニ『損田ニ引除置本田百姓開發ノ願於有之ハ其造用相計相應ノ免許可究遺事、但シ久年荒ニ成本田野芝同前之所除地割持地ニ望出候ハハ其通可究遺事』ノ記事アリ。由是觀之、本田割換區域中ニ介在スル損田ヲ開拓セントスルモノアレハ上司見分ノ上之ヲ許可シ、開墾完成ノ上ハ之ヲ割換ヨリ除外シタルヲ知ル。而シテ此ノ割換除外地ヲ通常『取扱本田』ト呼ヘリ。

茲ニ辨明ヲ要スルハ前章ニ於テ山内家入國以前ニ檢定セラレタル土地ハ總テ本田ト稱シ地割ヲ行ヒ、後チ郷土其他ニヨリ開墾セラレタル土地ヲ新田ト稱スト記シ置キナカラ、今本田中ニモ取扱本田トテ開墾ニヨル新田アリ、之ヲ割換ヨリ除外セリト云ヘバ、兩者混淆、渙然、シテ識別シ難キ感アルモ、實際ハ然ラス、由來郷土等ノ開墾ニヨル新田ハ廣大ナル一團ノ未墾地ヲ特許ニヨリ拓キタルモノナレトモ、茲ニ云フ本田中ノ新開地、即チ取扱本田ハ多ク狹少ノ水損地ヲ附近農

民ノ願ニヨリ開墾セシメ、開墾既成後土地生産力餘リ微弱ナルタメ之ヲ闢地ヨリ除外シタルニ基クモノナレハ、兩者ノ區別ハ自ラ判明スヘキナリ。

八、地割ノ順序及方法

土地割換ノ順序方法ヲ説明セル記錄トシテハ安岡百樹氏ノ『地割闢組法』カ比較的詳細ニ亘レルヲ以テ、今茲ニ同書ヲ骨子トシ、補フニ他ノ文書記録ニ散在スル記事ヲ以テシテ土地割換ノ順序方法ヲ述ヘン。

安岡氏ハ地割ノ一般的方法トシテ述ヘテ曰ク、『之ヲ要言スレハ、百町歩ノ一ヶ村アリ、農民百戸ニ甲乙ナク耕作ヲ營ムモノニシテ、即チ地ニ上中下アレハ一區毎ニ石盛ヲ定メ彼ノ地ハ上ノ上ナルカ故ニ一反歩ノ石盛ニ石二斗五升、此地ハ中ノ上ナルカ故ニ一反歩ノ石盛一石五斗、又下ノ下ハ石盛七斗五升ナドト名主五人頭及農夫一同立會確定シ、而シテ百町歩ノ石盛ヲ會計シ、反別百町歩、石盛米千二百七十石ニナルトキ一町歩ニ平均石盛十二石七斗トス、是則農夫一戸ニ配分スル所ナリ。而シテ下闢ノ中ニハ上中下又遠近ヲ組合セタルモノナレハ廉々明細ニ帳簿ニ記載シ其謄寫スルヲ闢札ト云フ。別ニ番闢百本ヲ製シ銘々抜き取り其番號ニ依テ闢札ヲ得ルナリ。偕テ此ノ闢札ヲ見合セ自家ニ遠キ地ナレハ他人ノ闢札ニ組合入レタル所ノ地ト交換シ相互ニ耕耘ニ便ナルヲ謀ルモノナリ、此方法ヲ稱シテ地割闢組ト云フ、而シテ地所ニ厚薄浮沈アルハ自然ノ勢ナレハ大概六年乃至十ヶ年目ニハ更ニ更正シテ又取り直スナリ』ト。是レ地割制度ノ方法ニ關シ總

論的概念ヲ與フルモノナルガ、安岡氏ハ同書ニ於テ更ニ檢地、等級ノ決定、石盛ノ方法、圖組法、帳簿記載、圖札及番圖、遠近交換地ノ順序ニヨリ詳細ニ記セリ。

イ、檢地

檢地トハ一名丈量、別ニ又地檢トモ稱ス、田字ニ筆限リニ檢繩或ハ檢地竿ヲ入テ縱横ノ間數ヲ知リ、普通ノ算法ヲ以テ縱横ヲ乘シ坪數ヲ得、定法ニ除シテ反別若干ヲ得テ其内地ノ廣狹ヲ知ル、之ヲ檢地ト云フ、其反別ヲ記載スル帳簿ヲ檢地帳ト稱ス、又國ニヨリテ水帖トモ云フモノナリ、水帳ハ御圖帳ノ義ナリ。

ロ、等級ノ決定

檢地ニ依テ既ニ毎田ノ反別若干ヲ得ルト雖、土性質ニ肥瘠アルヲ以テ例ヘハ一反步ツツ並列スル田地九區アルトキ之ニ上中下ノ位ヲ定ムルヲ給付ト云フ、第一區一段上ノ上、第二區一段上ノ中、第三區一段上ノ下、第四區一段中ノ上、第五區一段中ノ中、第六區一段中ノ下、第七區一段下ノ上、第八區一段中ノ下、第九區一段下ノ下ト位ヲ標定ス、此符牒ニいづまでもさかへるト九文字ヲ以テスルコトモアリ。

ハ、石盛

等級ノ決定既ニ終レハ石盛ヲ爲ス、例ヘハ左ノ如シ。

第一區一反、二毛田上ノ上、一步ニ級一升五合毛 此石盛二石二斗五升
第二區一反、同上ノ中、一步ニ級一升三合毛 此石盛一石九斗五升

第三區一反、同上ノ下、一步ニ粃一升五合五勺毛 此石盛一石七斗二升五合

第四區一反、一毛田中ノ上、一步ニ粃一升毛 此石盛一石五斗

第五區一反、同中ノ中、一步ニ粃九合毛 此石盛一石三斗五升

第六區一反、同中ノ下、一步ニ粃八合毛 此石盛一石二斗

第七區一反、一毛田下ノ上、一步ニ粃七合毛 此石盛一石五升

第八區一反、同下ノ中、一步ニ粃六合毛 此石盛九斗

第九區一反、同下ノ下、一步ニ粃五合毛 此石盛七斗五升

通計段別九反、石盛十二石七斗 平均一石二斗七升

是ニヨリ石盛ナルモノガ如何ナル方法ニヨリ行ハルルモノナルヤヲ知ルヲ得ヘシ。尙ホ石盛ニ關シ『地方大要』ノ『地割ノ事』ニ曰ク。

一、地割致候節、百姓相集、地割云合ノ村法ヲ立、地割年數極、名堅ノ連判其上ニテ田毎ヘ石入ヲ極ナリ、石入ハ粃石米石ニテモ同事ナリ、扱上中下夫々地石ヲ以致寄置、夫ヨリ致石割也、畠ノ善惡入合モ仕道ハ同前ノ事、其上ニ割當ル也、荒ヲ加ヘ各地商合ノ様ニ割入名々番附記置也、イヅレノ名トリニモ無甲乙地石トモ合候様ニ割合、クジ取ヲ以取事ナリ、或一名之地高十石ノ極、田方七石、畠二石、荒一石、又石入モ如此合候様割ルガ地割ノ本法也、則名札ハ夫々百姓所持ノ事。

一、石割ト云ハ一石ノ地高十石ト極候テモ少々地高ニ過不足有之逆モ石入云合ノ様ニ爲割共云ナリ。

二、圖組法

爰ニ一村アリ、本田反別百町步アリトセンカ、此石盛一千二百七十石トス、之ヲ草高トモ石高トモ云フ、之ニ依テ見レハ反別百町步ハ單ニ廣狹ヲ知ル名目ナリ、石盛ハ廣狹ニ拘ハラズ實地得失ヲ量ル基本ナリ、然ルニ反別百町步ヲ百圖ニ組合スル方法ハ毎圖反別一町步、石盛十二石七斗ニ符合スルノ方略ニシテ、圖ニ甲乙ナカラシメン爲ニ外ナラス、故ニ反別ハ空數ノ如シト知ルヘ

シ、但シ合セ方法ハ歌ガルタノ如キモノヲ排列シテ取合ハスナリ。

斯ノ如ク地質ノ上下ニヨリ圖ヲ組合セテ均衡ヲ保タントスルモノナレハ之カ實行ニ當テハ抄ラサル面倒ヲ伴ヒタルモノノ如ク、『地方大要』ノ『地割ノ事』ニモ

一、地割ハ至極六ヶ師モノナリ、水田麥地、上ヶ畦、川掛リ、空水、干田、或ハ畑上ケニモ可成地所澤田、谷入、アセ田、吉田、太田、苗床作廻老有リ、タトヘ石入ハ合候テモ地割入場所ノ考肝要、可成其村地ニ居リ、能ク知リタルモノノ不割合ハ不同可有事。

トアリテ、地割圖組法ノ如何ニモ面倒ナルコトニ説キ及ヘリ。

ホ、帳簿記載

圖組完了スレハ一番ヨリ百番迄區別シテ每番ニ組入タル田區反別石盛若干、且前小作人名前ヲ記ス、又帳末ニ年號月日百姓名前ヲ記シ連印ス。

ヘ、圖札

次ニ圖札ナルモノヲ製ス、圖札トハ帳簿ニ記載セル通リ謄寫スルモノニシテ且ツ本帳ト合判ヲ押スナリ。圖札ニ關シ『地方慣習手引草』ノ記事ニ曰ク。

一、圖札ナル者ハ圖引ノ節村役所ニ於テ調製致シ圖當人ニ一枚ツツ相渡シ來レリ。

一、其圖札ニ餘白アル限リハ數度ノ圖引毎ニ餘白ヘ圖引ノ年度及ヒ其圖當人ノ名前ヲ記シテ其人ニ渡シ來レリ。

一、圖札ノ始メニハ必ス(本作人何某)ト記載スル例ナリ。

今、土佐郡イツク一宮村ニ於テ明治五年マテ使用セラレタル圖札ノ寫ヲ示セハ左ノ如シ。

一宮村園札ノ内寫

本人

只 八

壹番

イ上

ツイヂカウデ

一、五代二步

吉米二斗五升

イ中

國近高二反十代步ノ内

一、一反五代一步

太一石三斗也

ロ中

島トウカ東三高四反三十二代三步ノ内西ヨ

リ二

一、一反七代壹錢

太一石四斗也

ト、番園

番園ハ各自ノ持分ヲ決定スル物ニシテ、前項例示ノ如ク一村ヲ百園ニ割ル場合ニハ一番ヨリ百番マデ百本ノ園ヲ製シ其一端ヲ殘シテ紙ニ包ミ園親ヲシテ抽籤セシメ何右衛門ハ何番、何助ハ何番ト決定シ之ヲ帳簿ニ記入スルナリ。

テ、遠近地交換

ロ中

勘定ノ西ヨリ四南申廿五ノ札ヨリ入

一、四十九代

太一石也

中略

メ地一町十代三步 同

米十三石二斗五升吉

萬延元年

九郎作

申六月

元治元年

伊右衛門

子六月

慶應三年

長治

辰六月

明治五年

德治

申六月

儀平

既ニ取リタル圃ハ必ス地味ノ上中下ニヨリ遠近ヲ組合セタルモノナレハ農家カ實際耕作ヲ爲スニ當テハ多大ノ不便ヲ伴フヘキハ言フヲ須ヒス、是ヲ以テ農家ハ地割圃組ヲ終フルヤ互ニ相談シテ彼我遠近ノ地ヲ交換シ、耕作ニ不便ナカラシム。交換ノタメ土地ノ收穫ニ多少ヲ生シタル場合ニハ既ニ確定セル石盛ヲ參酌シテ過不足ヲ定メ玄米ヲ以テ計算ヲ了ス。

以上記スル所ヲ綜合スルニ地割ヲ行フニハ先ツ土地ヲ丈量シテ田地一筆毎ニ面積ヲ算出シテ檢地帳ニ記入シ、次ニ各筆ノ一坪ノ收量ニヨリ全田ノ收穫高ヲ算出（石盛ヲナスニ當リ粃ヲ調製スレハ粃ノ十分ノ五ハ玄米トナルモノト計算ス）シテ石盛ヲ定メ、更ニ各筆ノ石盛ヲ合計シテ之ヲ圃數ニテ除シテ一圃ノ割前ヲ算出シ、田地ト人家トノ遠近、便不便ノ如キハ一切考慮ニ置カス、一ニ各戸（圃主）ノ持分ヲ均等ナラシメンタメ彼處ヨリ一筆、此處ヨリ一筆ツツ拾ヒ集メテ平均割ノ數字ニ近キ收穫高ヲ得テ圃組ノ作業ヲ了ルナリ。次ニ之ヲ圃ノ順番ニ帳簿ニ記入シ、圃毎ニ之ニ組入レラレタル田區ノ反別ヲ記入ス。右終レハ番圃ナルモノヲ製造シ、各自ニ之ヲ抽カシメテ其持分ヲ決定シ、之ヲ別ニ調製シ在ル圃札ニ記入シ各戸ニ交付ス、交付ヲ受ケタル圃主ハ元來圃組ナルモノハ前記ノ如ク一ニ各圃ノ收穫高ヲ均一ニセンタメ家屋トノ距離ヲ無視シテ爲サレタルモノナルヲ以テ、耕作上多大ノ不便ヲ感スルハ免レ難シ、是ヲ以テ地割終了スルヤ各農家ハ更ニ互ニ協議シテ持分ノ一部又ハ全部ヲ他ノ圃主ト交換シ、耕地ヲ自家ノ都合ヨキ地ニ集合ス、此ノ交換ノ爲メニ生シタル收穫米ノ過不足ハ秋期米穀ヲ授受シテ計算ヲ了スルナリ。

九、地割制度ト農民ノ經濟

地割制度ハ實ニ六公四民否ナ實際ニ於テハ八公二民テフ重稅ヲ負擔スル農民ノ土地生産力ヲ均分シ且ツ後代農民ノタメ地産力ヲ維持スル目的ヲ以テ行ハレタルモノナリト雖、農民ハ此制度ノ下ニ於テ果シテ安岡氏カ『公私ノ良法タルコトハ素ヨリ論ヲ待タス、如何トナレハ數百年間差支ノ件一モナク、又農民モ平均スル方法ナルヲ以テ耕作スル方法中第一等ナルモノト信ス』ト言ヘルガ如キ幸福ト利便ヲ見出シタリヤト云フニ事實ハ必スシモ然ルモノアラサリシニ似タリ。地割制度ノ創始以來農民ハ土地處分ニ對スル制限ヨリ來ル經濟上ノ壓迫ト苛稅ノ誅求ニ基ク苦痛ヲ幾分カ緩和セラレタルニ相違ナシト雖、固ト是レ農民ノ窮境ヲ救ハントテ案出セラレタル一種ノ彌縫的政策ニ過キサレバ其ガ到底萬能ノ効果ヲ顯示シ難キハ理ノ見易キ所ナラスンハアラス。思フニ地産力ノ均等分配ハ瘠地ヲ耕作シツツアリシ農民ニ取リテハ多少ノ利益ヲ來スヘシト雖、爾餘ノ農民ニ取リテハ一切關與セス、中ニハ爲メニ反テ迷惑ヲ蒙ルモノアリシハ想像スルニ難カラス、又割換ノタメ農家不豫ノ災難ニヨリ耕作ノ不精ニ陷ルヲ矯メ、以テ後代農民ノタメ地産力ヲ維持シテ農村文明ニ永久性ヲ與フルノ効果ハ看過スヘキニアラスト雖、個々ノ農家經濟ガタメニ幾層倍ノ利潤ニ浴シタルヤニ就テハ疑問ナカラサルヲ得ス。更ニ之ヲ別途ノ方面ヨリ視察スレハ地割制度ノ下ニ在リテハ土地ハ一村ノ共有ニシテ私有ヲ認メス、多量ノ肥料ヲ施給シ、耕作ニ出精スル農家ト雖數年ノ後ニハ又他ノ劣等田地ヲ耕作セサルヘカラサルカ故ニ、耕主ハ私有ノ場合ノ如ク全力ヲ擧ケテ耕作セサルガ常ナルヲ以テ土地ハ益々瘠薄トナリ、生産力ヲ低減シ以テ本制度ノ持續ヲ以テ不可ナリトスルノ觀念漸ク農民ノ腦裏ニ切スルニ至ルハ必然ノ結果ナリ。加之、土地割換ハ其手續煩雜ニシテ數年毎ニ精細ナル帳簿ヲ設ケ各人ノ苦情ナキ様平等ニ割リ換フルガ

如キ、平生秣糧ニノミ親ム農民ノ作業トシテハ餘リニ重荷ニ過クルノ嫌アルヲ以テ可成本制度ノ實行ヲ避ケントスルニ至ルハ自然ノ數ナリト謂フベシ。又地割制度ノ下ニ於テハ精勤ナル農家ガ折角力ヲ盡シテ豐穰地トナシタルモノモ五、七年或ハ十年ノ後ニハ抽圃ニヨリ之ヲ他人ニ渡サザルヘカラスシテ其ノ迷惑タルヤ一方ナラズ、然モ是レ藩ノ制定セル掟ナレハ如何トモスル能ハサルヲ以テ、斯ノ如キ場合ニハ表面圖當リノ田地ヲ耕作スト稱シナガラ内實ハ嚴禁ヲ犯ンテ私カニ勤農者ガ惰農者ニ報償ヲ出シテ甲乙互ニ從前ノ土地ヲ耕作スルノ方法ヲ講スル等種々ノ便法内密ニ行ハルルニ至レリ。而シテ土佐ノ本田ニ於テ最モ廣ク行ハレタル夫ノ上土ウハツツ（耕作權）、底土ソコジツ（加治子收得權）ノ慣習ノ起因ハ直接地割制度ニ胚胎セリトハ言フヲ得スト雖、土地共有、他村又ハ他階級ニ對スル賣買禁止等土地處分權利限ニ對スル農民自體ノ緩和策トシテ生レ出テタリト見テ不可ナカルベク、此ノ上土ウハツツ、底土ソコジツノ關係ハ村落ノ土地制度ヲシテ更ニ一層複雑ナラシメ、前記精農ガ惰農ニ報償ヲ拂フテ私カニ同一ノ土地ヲ永久ニ耕作スルノ慣習ト相待テ益々地割制度ノ續行ヲ困難ナラシメタルモノユ尙タリ、現ニ香美郡田村ニ於テハ天保年間ニ割換ヲ行ヒ、爾來數十年間前述ノ如キ理由ノ下ニ之ヲ中絶シタリシガ、慶應年間上命ニヨリ村民協議シテ再ヒ割換ヲ行ハントセシモ、耕地保有ノ關係彼此紛糾シテ到底之ヲ實行スル能ハサリシト云フ。斯ノ如ク種々複雑ナル事情ト障礙ノ下ニ本制度ハ維新前ニ於テ既ニ漸ク廢滅ニ傾キテ實行セサル村多ク、唯土佐郡一宮村其他ノ村落ニ於テ明治初年、地租改正ノ當時マデ之ヲ持續シタルニ過キズト云フ。

追記

本篇起稿後有益ナル助言ヲ與ヘラレタル文學博士内田銀藏氏、山内侯爵家保藏ノ文書ノ閱覽ヲ許サレタル同家史編纂主任沼田頼輔氏及筆者ノ質問ニ對シ懇切ナル返書ヲ送ラレタル高知市坂本久壽氏ニ對シ深謝ノ意ヲ表明ス、尙本篇ノ本誌掲載ニ就テハ豫メ帝國農會ノ許諾ヲ經タリ。

（大正六年九月二十四日稿了）